

學 會

第49回日本皮膚科學會岡山地方會演說抄録

昭和 16 年 12 月 21 日

於岡山醫科大學皮膚科泌尿器科教室

陰莖結核疹經過中に初期硬結を發現せる1例

田 中 逸 穂(岡大皮)

患者 健本某男 30歳 初診 昭和16年9月5日 主訴 龜頭における潰瘍形成。家族歴及び既往歴に特記すべき事なし。現病歴 約5年前陰莖繫帶部に小創を生じまもなく左側鼠蹊部に有痛性横痃を生ぜし事あり。昭和12年4月頃より屢々陰莖龜頭部に小膿疱を生じ常に1週間位で治癒し疼痛痒感等自覺症を全く缺けり。本年8月中旬又も小膿疱を生じ治癒せず。現症 體格榮養中等度可視粘、内臓諸器關に異常なし。WaR, 村田, Kahn 反應等すべて陰性。局所所見 陰莖繫帶龜頭部に4箇の不正形小潰瘍あり、内2箇は超麻笈大にして龜頭冠に近く存し他の2箇は蠶豆大にして外尿道口を左右に相挟みて位す。潰瘍面は深く穿掘し黃色膿様の苔を被り周圍との境界鮮明創縁は殊に發赤し鋭く著明なる浸蝕を示す。中等度の壓痛を有するも自發痛を缺く。外尿道口は浮腫狀に腫脹し輕度に發赤を呈す。治療及び經過 水銀石英燈照射, T. A. F. の注射を行ひ Radium 40 mg. St. 照射, 9月14日冠狀溝左側縁長形蠶豆大の小隆起を生ぜり。表面は平滑にして汚穢暗褐色をおび境界略ぼ鮮明にして著しく硬結を觸る。自發痛はなけれど輕度の壓痛を訴ふ。同18日再び微毒血清反應を行ひしに依然として陰性なるも周圍の硬結益々著明となるを以て初期硬結なりと考へ直ちに Salvorsan 3號を注射す。

4日後3度目の血清反應を行ひしに WaR, 陰性村田, Kahn 兩反應共中等度陽性に現はる。斯くして Salvorsan 注射3回後初めて血清反應陰性となる。初期硬結は漸次著明に吸收され同25日には壓痛も減じ同27日に至り全く吸收されたり。陰莖結核疹は T. A. F. の注射, 水銀石英燈の照射等により10月14日に至り漸く瘻痕を残し治癒せり。

類宦官症の1例

向 井 克 彦(岡大皮)

患者 景○秀○ 26歳 初診 昭和16年12月12日 主訴 生殖器發育不全。家族歴 父は健、同胞なし、母は47歳胃癌にて死亡、患者には同胞5人、患者は長男、姉は結婚し舉子2あり。既往症 麻疹を經過、種痘善感、18歳肋膜炎に罹りし他著患なく、中學時代は地歴等の暗記物は得意なりき。徴兵検査三種合格。現病歴 中學時代より陰莖の發育不全を氣付く、早朝勃起はあるも、手淫、夢精等の經驗なし。現症 體格、榮養中等度、顔貌柔和、音聲は子供の如し、眉毛薄し、胸腹部内臓諸器關異常を認めず、陰毛僅か數本、短小なり、陰莖は包莖をなし長さ常時1.5cm、龜頭も小にして恥垢滯溜す、舉丸兩側共捫指頭大、攝護腺部は柔軟にして其の輪廓殆ど觸れず、微毒血清反應は陰性。

演者は全裸身寫眞及び「トルコ鞍」右前膊等のレントゲン寫眞に付き説明せり。

皮膚護理腫の2例

大村 順一(岡大皮)

第1例 43歳男。家族歴 子供10人 生れ、内3名は何れも生後2—3箇月にて死亡せり。死因不詳。この患者は24—5歳の時に屢々感染機會ありたり。16年4月頃より右上腿前面中央部に3箇の腫瘍を生じ、何れも靱硬にて銅赤色を帯び痛痒なし。この中1箇は典型的的腎臓形を呈し、一方堤防狀に隆起し他方落屑あり。16年7月4日初診にて微毒血清反應は強陽性、血液便に稍々貧血を認めたり。驅微療法により1箇月後に硬結消滅し著しく快癒せり。第2例 51歳男。19歳の時に軟性下疳を生じ、49歳の時、右乳房の下に1箇の小鶏卵大の腫瘍を生じ約3週後に自潰し、癢痕治癒をなせり。この後次々に右前胸部に同様の腫脹を生じ、何れも癢痕治癒をなせり。之等の腫瘤の或ものは肋骨に癒着し、又或ものは移動性を帯びて居た。かくて3年後殆ど右前胸部に新舊の癢痕を生じたり。微毒血清反應は強陽性にして型の如く驅微療法を施行せり。

結核性結節狀靜脈炎の1例

成川 俊光(岡大皮)

24歳男の下肢に多發せる小結節の皮疹にして患者は「胸椎カリエス」、頸部結核性淋巴腺炎を有しマンツ—反應強陽性にして結核性體質を有す。演者は局所々見竝に局所結節の組織學的所見を述べ特に靜脈に於ける變化に就き説明せり。

皮膚疣狀結核の1例

成川 俊光(岡大皮)

31歳男。事務員の兩側腕關節部外側、右肘部外側、左拇指伸展側に發生せる典型的皮膚疣狀結核疹の1例に就き述べ、此患者に於ては胸部内臟諸器關には異常なかりしと。

追加 向井 克彦

本症1例を追加し「ムラチ」及び組織標本を供覽せり。

各種蒼鉛劑の性状に就て

石 天之樞(岡大皮)

注射後蒼鉛の腦脊髄液移行量は蒼鉛の電荷狀態により異り、溶液に於てBiが①全部Anionとして存在せるThiobisは最多量、②大部分Anionとして存在せるMilaneuenは之と略ぼ同量、③全部Kationとして存在せるBistolnは上記2劑より少量なり。即ち溶液に於てBiがAnionとして存在せるものはKationとして存在せるものよりも、よりよく腦脊髄液に移行するものなり。中毒を起すBi量は各蒼鉛劑の組成により異り、ThiobisはBistolnより甚だ烈しき中毒を起し易く、BistolnはMilaneuenより中毒を起し易し。而して同一劑を同一量用ひたる場合の中毒の程度は各家兎の個性の差異により多少相異なるものなり。然れども中毒死を來せるものに於ては何れも尿中のBi排泄量は少量(腎に於けるBi排泄障礙の爲に)にしてOligurie又はAnurieに消化器の障礙を併發し居れり。注射後體內に滯溜するBiの期日はMilaneuenに於て最も長く、Bistoln之に亞ぐ、而してThiobisに於て最も短し。

月經疹の1例

須賀 清次郎(岡大皮)

原著として發表の豫定。

環狀肉芽腫と誤まれたる結節狀微毒疹の1例

岡崎 正敏(岡大皮)

患者 谷本某女 52歳 無職。主訴 右手背の正環狀の皮疹。既往症 20年前に右乾性肋膜炎に罹りし事あり、流産、早産はなし。現症 2箇月位前に右手背に僅に薄環狀紅色の正環狀の小貨幣

大の皮疹が唯一箇生ぜり、別に自覺的症狀なし。一般所見、皮下淋巴腺腫大なし、瞳孔、口腔内粘膜異常なし。肺呼吸音一般に弱く、鎖骨下部に小水泡を聴診す。ビルケー氏反應 24時間、48時間共に陽性。微毒血清反應 WaR(卅)、村田(卅)、Kahn(卅)。局所々見 右手背中央より少しく尺骨側に寄りて小貨幣大の正環狀の皮疹あり、皮疹の邊緣は堤狀に隆起し、僅に蒼紅色を呈し、中央部は平等に陥没し、平滑なり、着色も亦周縁より少しく薄し、硬度は硬からず、壓痛、皮下組織との癒着なし。組織學的所見 主なる變化は眞皮の浸潤にして約中層迄伸びてゐる、浸潤は主に血管周圍にして上皮様細胞、淋巴細胞及び多くのラングハンス氏の巨大細胞、「プラズマ細胞」なり、表皮は浸潤の強き處は多少薄くなれり。

實驗家兎微毒に於ける含水炭素新陳代謝の研究 (第3報) 「アドレナリン」及び「インゼリン」注射による影響に就て 黒山眞吾
原著に譲る。

「アルバジール疹」の1例に就て

江原敏夫

太田某男、51歳、農業。初疹：昭和16年8月19日。主訴：全身殊に顔面、背部の掻痒性皮疹。既往症：毎年掻痒性皮疹を生じ、本院にて約5年前濕疹の診断を受く。現病歴：約2箇月前被髪頭部に掻痒性丘疹性痂皮狀皮疹を生じ、之が治療の目的で「アルバジール」60錠を服用せしに頭部皮疹の輕快を認めしが、8月9日頃突然39°Cの熱發を伴ひ先づ顔面に鮮紅色小指頭大丘疹輕微掻痒性の皮疹を數箇生じ漸次背面胸部四肢に擴張す。局所所見：皮疹は顔面上背部に多發、上胸部、兩上膊伸屈兩面之に次ぎ、兩下腿に於ては數箇を算す。被髪頭部、兩前膊、臀部、腹部、兩大腿、關節屈面頸部等には皮疹なし。皮疹は播

種狀にて對側性ならず、各皮疹孰れも結節狀にて著明に平等隆起し、豌豆大一胡桃大なり。圓形或は不正圓形にて表面全く平滑ならずして僅に凹凸し細皺を表す。結節の中心は紫藍色にて多少陥没せるものあり。周邊部は之に反し汚穢黃赤色を呈す、壓痛なし。

尋常性狼瘡の1例

橋 英 基(岡大皮)

19歳、女、15歳の春頃「ニキビ」又は「アセモ」様の發疹が數箇集り左側鼻孔内面に發現し自覺症は缺如してゐたが夜間就眠時膿様分泌物が流出する事があつた。耳鼻科にて肥厚性鼻炎のもとに治療を受け自覺症狀大いに輕快したが根治しなかつた。其の後特志看護婦として事變に従軍中北支に於て惡化、種々治療を受けたが左側鼻翼から鼻尖部にかけて脱落したと。患者は體格、榮養中等度、瞳孔、眼粘膜、口腔等可視粘膜に異常なく、胸部内臟器關正常、淋巴腺腫なし。血清微毒反應陰性、ビルケー氏反應 24 St. (-, +, +)である。局所々々見として左側鼻翼部より鼻尖部に斜に脱落缺損し鼻中隔部も少しく脱落す、表面は平滑、稍々灰白色を呈し健康皮膚部との境界は不明劃である、抵抗は少しく癢痕様強靱さである。硝子壓に對し狼瘡性小結節の斑點を示さない、又膿疱、鱗屑或は潰瘍性肉芽面等は存せず、鼻孔内面、鼻中隔壁は表面平滑稍々發赤してゐる他異常はない。患者は4月より11月末まで外來に通院治療「ラヂウム」、水銀石英燈を使用、再發の兆依はなかつた。

「ズルフオンアミド劑中毒」の癩を誘發せりと思はるる例

保 田 耕(光明園)

患者：23歳男子、某會社員なりし者。家族歴：癩發病者無しといふ。又家族外傳染關係も不明なり。既往症：特記すべきもの無し。現病歴：本年1月下旬淋疾を患ひ、藥店より「テラ

「ボール錠」を求め 1 日 3 錠宛服用せるに、約 10 日後發熱と共に顔面及び四肢に蕁麻疹様發疹を生ず。其の後も數日間同錠服用して淋疾自覺的に輕快せるにより服用中止す。發疹數日にして消失す。然るに 3 月中旬に至り淋疾再發の徴ありしにより再び同錠を服用すると共に、3 月 22 日某醫院に於て治療を受く。其の際も「ズルフオンアミド劑」1 日 5 錠宛服用を命ぜられ、又 2—3 回皮下注射を受く。同月 27 日惡寒戰慄を以て發熱、前回同様の發疹現れ、下痢を伴ひ、數日間全身疲憊す。藥劑中毒ならんとせられ直ちに内服及び注射を中止して他の療法を行ふ。同 29 日顔面發赤腫脹、兩側臀部に該疹融合せるが如き大なる紅斑生ぜりといふ。速かに解熱し、蕁麻疹様發疹亦間もなく消散せるも顔面及び臀部の紅斑は去らず、眉毛も幾分脱落す、藥劑中毒として長く治療さるも效果無く、後他器により癩の疑ありとせられ、本年 8 月 27 日本國に收容せらる。當時の主なる所見 顔面及び臀部(主として左側)の隆起せる斑紋、急性増悪型。同部知覺鈍麻。眉毛左側稍々疎。兩側大耳及び頭皮神經の中等度乃至高度の肥厚。尺骨及び腓骨神經の輕度肥厚並に壓痛等。淋疾は治癒の状態に在り。

斑紋癩急性増悪型として治療を加へ次第に輕快しつつあり。本症例は「ズルフオンアミド劑中毒」により誘發せられたるものと考へらる。

再發性淋菌性關節炎に就て

立 花 岩 吉 (岡山市)

26 歳男、8 年前尿道淋に併發して右足拇趾の淋菌性關節炎を起し、以來今日迄に同一箇所に 7 回關節炎を再發せる 1 例を報告せり。

追 加 荒 川 一 郎 (岡山市)
同症 3 例に就き追加せり。

質 問 根 岸 博
Ankylose の有無如何。

答 立 花 岩 吉

Ankylose は認めざりき。

追 加 根 岸 博

淋疾に罹患し關節炎を惹起する場合は大抵淋菌皮内反應が陰性なるか或は極めて微弱なる事を追加す。

巨大陰莖癌の 1 例

平 松 直 (岡山市)

46 歳、昭和 16 年 10 月 7 日初診。家族歴として兩親同胞に癌、性病なし、學子なし。既往症 生來健、花柳病拒否、16 歳頃左辜丸自然に腫脹疼痛あり醫治により縮小治癒せり。現病歴 生來假性包莖、約 10 年前、陰莖背部冠狀溝に指頭大の腫物生じ小切開を受けしまま放置せしが腫物の變化なく又疼痛もなく経過せり、7 月頃より該腫物増大し且陰莖、陰囊も腫脹し全身衰弱、8 月より體溫上昇を來たせりと。現症 體格中等、營養不良、高度の貧血性あり、鼠蹊腺左右各 5—6 箇宛豌豆大、ワ氏反應陰性、乳嘴狀増生物恥骨下部より陰莖全體下方陰囊に及び膿腺分泌物惡臭甚しく直徑約 12—13 cm あり、組織學的に扁平上皮細胞増殖著明なり、豫後不良を想はしめたり。

追 加 根 岸 博

包莖と陰莖癌の發生と密接なる關係ある事は周知の處なるが包莖の多き中國人に陰莖癌の多き事を最近聞知せるを以て追加す。

色素性乾皮症の 1 例

森 岡 雄 太 郎 (高松市)

高橋某男。5j。生後 50 日の頃丹毒を患ひ夫れ以後、顔が赤くなり一進一退して治せず、血族に同症なしと云ふも父は兩頬部漆灰褐色にして色素に富み、母は異常を認めない、從來種々な醫療を受けたが寸效もなく最近は Vitamin C の注射をして居たと云ふ。現症 營養體格尋常であるが顔

面、側頭部、前頭部に粟粒大乃至麻實大の雀斑様黒褐色斑が無数に存在し播種状を呈する、特に兩頬前額に著しく且頬皮は稍々潮紅して落屑を生じ一部に皸裂を認める、羞明あるらしく面を伏せる傾向あり、腋窩其の他に斑を認めぬ、初診後7月中旬まで約4箇月餘加療したが5、6月頃から裸出部即ち手背、大腿伸側に手背大の紅斑を生じ落屑を以て消褪し反覆出沒し本症と日光との間に因果關係あることを暗示した。治療 特種のものが無いので砒鐵劑などを内服せしめ局所に對症的處置をしたが「卵胞ホルモン」が雀斑に奏效すると小榮博士が強調せられた事を想起して、「プレホルモン」75單位から100單位宛を毎3日に注射した、其の結果10回目頃から色素が褪色する傾向を示したので25回まで續けたが一程度以上は効果が無かつた。單位關係かと考へて200單位に増量したが間もなく患者が來なくなつた。要するに色素沈着に對する「プレホルモン」の作用が或る程度認められた外本症を治せしむることは素より不可能で其の皮膚の過敏性も何等の影響を受けないことを申述べた。

瘰癧と「腦下垂體ホルモン」

森岡雄太郎(高松市)

瘰癧が青春の男女に頻發し所謂惡液性瘰癧を除けば強壯者に多い、其の因子としてこの期の者が外界との接觸多くして外來の刺戟を受ける機會多

く且生理的にも活動的な物質代謝の結果皮脂分泌の過多等が理論付けられる、併し其の青年期に多い事には尙ほ別箇の因子があると考へられる、夫れは恐らく性的機能に連繫するものだらうとは何人も首肯し得ると思ふ。私はこの觀點から次の3例に「腦下垂體前葉ホルモン」、「ヒポホリン」を注射して相當の良果を得たので茲に報告し各位の御追試と批判を乞ふ。

症例 I. 26 j. ♀ 既婚であるが大々淋疾感染し月餘加療中に頬部に瘰癧の頻發を見た。即ち此者は脂肪攝取刺戟香料等の食餌の原因なく且安靜にして居た時に發病した、「ヒポホリン」1.0、5回注射で快癒した。

II. 19 j. ♀ 榮養良き未婚婦、顔面に小瘰癧が多發して來院した。5回注射後新發生瘰癧9回9ccで全治した但し2回紫色 Sollux を照射す。

III. 20 j. ♂ 未婚で顔面殊に頬額、側頭部等に密集發生して居たが Sollux 紫照射2回と「ヒポホリン」4回注射で殆ど治した。

以上3例共局所に「硫黃レゾルチン膏」を塗付させたが多くは晝間これを用ひず其の効果は期待されぬに係らず短時日で治したのは「生殖ホルモン」と瘰癧の間に何等かの關連あるを思はせられた。

北支に於ける醫事衛生

根岸 博(岡大皮)

原著として醫事雜誌に發表の豫定なり。